ことしは釧路開基百年の年で、八月一日の記念式典を中心に数々の催しがすでに行なわれております。市の公的な行事、事業のほかに市民団体によるさまざまなプログラムも枚挙にいとまないところです。

私は開基百年事業として、何が記念事業としてもっともふさわしいものだろうかとあれこれ考えこみました。私一人だけの考えではもちろん良い案ができるものではありませんので、多くの人々の意見もいただきました。その結果、「植樹がよい」との結論に達しました。「木を植える」、もっとも平凡なことです。しかし反面すべての人が求めていながら行ないがたいことです。

植樹の事業は、「一戸一木運動」と名付けました。この名称で明らかなように、木を植えるのは市民一人一人であり、開基百年の行事が記念式典だけで終わるのではなく、この百年を記念して植えた木は、このあとの百年にまで引きつがれるであろうことを期待しながら、誰もが、誰からの説明がなくとも、気軽に、しかも積極的に、さらに楽しく参加できる記念事業となるはずであります。

事実、ことはそのように進みました。いかにも全市のすべての戸数が参加したといえます。

もっと光を もっとみどりを

山口哲夫

市は苗木の手配、各戸への配布を行ない市内の各町内会は、それぞれ町内会単位に植樹の申し込みを市へ持ち込んできました。申し込みが当初の計画を大幅に上まわったため、苗木の手配を練りなおすなど、うれしい悲鳴もありました。五月初旬、市内春採湖で公的な記念植樹をしましたが、その前後に苗木は各戸に配付されました。ことし、春採湖をはじめ、市内各所に植えた本数は約六万本です。

ある人、それは植物の専門の方ですが、釧路市程度の市域を持つ都市が、一見、緑豊かだと思うのには、約二十万本くらいの樹があればいいのではないかということを教えてくれました。そのうち半分はいわゆる公園の中に、そしてあと半分が街の中にあるというような姿がよいというのであります。現在の釧路に何本の木があるのか数えた人はありませんが、大体二～三万本ではないのかといわれております。

この数は一見相当な数に思われるのですが、じつは現在釧路市内にある木は、そのほとんどが樹令の若いものばかりです。そのために多くの木は私たちに豊かな緑を感じさせるにはいたりません。大空にそびえ立つような豊かな枝と緑の葉は、その下にたたずむ人に心からの緑を感じさせます。むしろ緑を通して「自然」を感じさせてくれるのです。しかし残念なことに、釧路にはそのような樹はほとんどありません。だから街を散策してもあまり緑を感じない、緑が乏しいという印象を受けるのです。

しかし、ここ数年の間に釧路はだんだん緑を回復してきていると思います。一例を博物館のある鶴ケ岱公園にとってみましょう。

公園の入口にはヤチダモが百本近くありましょうか。これを植えたのは、いまから十五、六年前だったかと思います。植えたときは人の背丈ほどだったのですが、いまでは博物館の屋根と背くらべをしているようなものもあります。下草をきれいに刈り込んであるこのヤチダモ林では、よく家族連れでお弁当を楽しんでいる光景をみかけるようになりました。

木は用杭などの産業用とするには、どんなに早いものでも二十五～三十年、種類によっては七十～八十年もかかるといいます。しかし、眼で見る木は二十～三十年経てばまずまずでしょう。そして植樹をするときは苗木そのものが十年近く経っているとすれば、二十年の木は十年余で「緑」となってくると思います。

こんなことを考えながら、私自身も「一戸一木運動」に参加し、ナナカマド、シラカバ、エゾザクラの三本を庭に植えました。

幸いなことに根付きもよく、上手に育ってくれています。庭には樹令二十年ほどの

ナナカマド、エゾザクラがあり、表通りに対しては間違いなく街路樹代りをつとめています。

たしかに、植樹というものは気のながい根気のいる仕事だとは思いますが、反面、これほど人間に執着を覚えさせるものもありません。

旧市役所庁舎の横に出世坂という、やや急な坂道があります。相当以前はあまり急なので地獄坂ともいったのですが、縁起の悪い名前なので出世坂と改名した、いわば因縁の深い坂です。ここの両側にやはりヤチダモが植えてあります。毎日通る坂なので、このヤチダモをときどき思い出します。これは、学校を卒業し市役所に入ったいわゆる新入職員が記念に植えたもので、十年くらい経っています。「しっかり植えなさい、枯れたらクビだよ」などの激励の中で植えたものですから、おそらく植えた人たちは、どの木が自分の木だと思っているに違いありません。いま、街のなかにある木を一本一本たずねてみたら、すべて誰かが心をこめて植えたものにちがいありません。おそらく一本だって自然のままのものなどはないはずです。

こんな思い出もあります。春採湖畔の史跡チャランケチャシには、樹令数十年のものが何本かありますが、ある老先生とご一緒したとき、「この木は私が植えたんですよ」といわれて、その先生が樹木のように見えたことがありました。

私はときどき考えます。「私たちをとりまく環境のなかに、〃自然〃というものがあるのだろうか」と。〃自然〃というと何か人為の何もおよばないものといった錯覚におちいりますし、自然を愛するとか、自然をまもるとかいう、その〃自然〃とは、じつは人為的なものなのではないでしょうか。少なくとも都市生活の周辺に自然を求めるとすれば、それは作っていかなければならないものではないでしょうか。

まして釧路のように膨張の激しかった街はまず現実の生活に追われ、その中に緑を作るといった余裕のなかったのが実情だったと思うのです。

開基百年の年に当たってふと思うのですが、百年前に私たちがいま求めている自然がそこにあったといえるでしょうか。たしかにそこには樹木も生い繁り、小鳥もさえずっていたことは明らかです。

春採湖には丹頂が舞い降り、美しいひぶなもあったといいます。誰もそのことを否定はいたしませんが、それをまったくそのままにして街をつくることのできなかったことも、事実として認めなければなりません。

いまにして思うならば、私たちは自分ひとりの住まいを作っていくとき、ひとりひとりの住居のことだけでなく、みんなが共同して住む場、生活する場をあわせてつくるべきだったのです。

そんなことを考えて、開基百年記念行事の植樹を終えたのであります。

これはまた〃自然〃をつくることだとも思うのです。

たしかに現実的な問題として、現在の都市は自らを汗し、崩していく反面を持ってきました。一生懸命に住みにくさを作ってきたことも否定できません。それはいろいろな形で表われているし、またこれに対する対策も急がれているにかかわらず、その実効が上がっていないことも承知のとおりです。

住みよい街でありたいということは、誰しもが願うところでありますが、ただ願うだけで物事の解決はできないでしょう。

「街の中に緑を」とプランを考えて、実行に移してからでも少なくとも二十〜三十年の歳月が必要なことは、先ほどの釧路の一戸一木運動でも述べたとおりであります。

したがって、私は自然を都市が破壊したのではなく、都市が自然を作らなかったと考えたいのであります。

江戸川はそのむかし白魚の漁場でもあったといいます。「白魚の色白きこと一寸」の名句のように、江戸川の水は美しかった。おそらく東京の大きな願いの一つは、江戸川に、そして隅田川に白魚の姿をみることでありましょう。

これに似たことをロンドンでも考え、実行したという話を聞いたことがあります。

イギリスの国会議事堂（ビッグベン）はテームズ河畔にあります。その議事堂に得体の知れない悪臭が窓から入ってくるので、その原因を調べたらテームズ河の汚濁であると知った議員たちは、早急にテームズ川に「白魚の姿をみよう」（?）という議決をし、やがてテームズは美しい河になったというのであります。

ことの真疑は知りませんが、私も釧路川を美しい河にしたいと願っています。これは、この街に住むすべての人々の願いであると思います。

都市化の進行とともに失われ、損われていきつつある太陽の光、清い空気、きれいな水したたるようなみどり、それらを私たちは市民の名において、人間の名においてとり戻し、復活させなければならないと考えるのです。

（釧路市長）